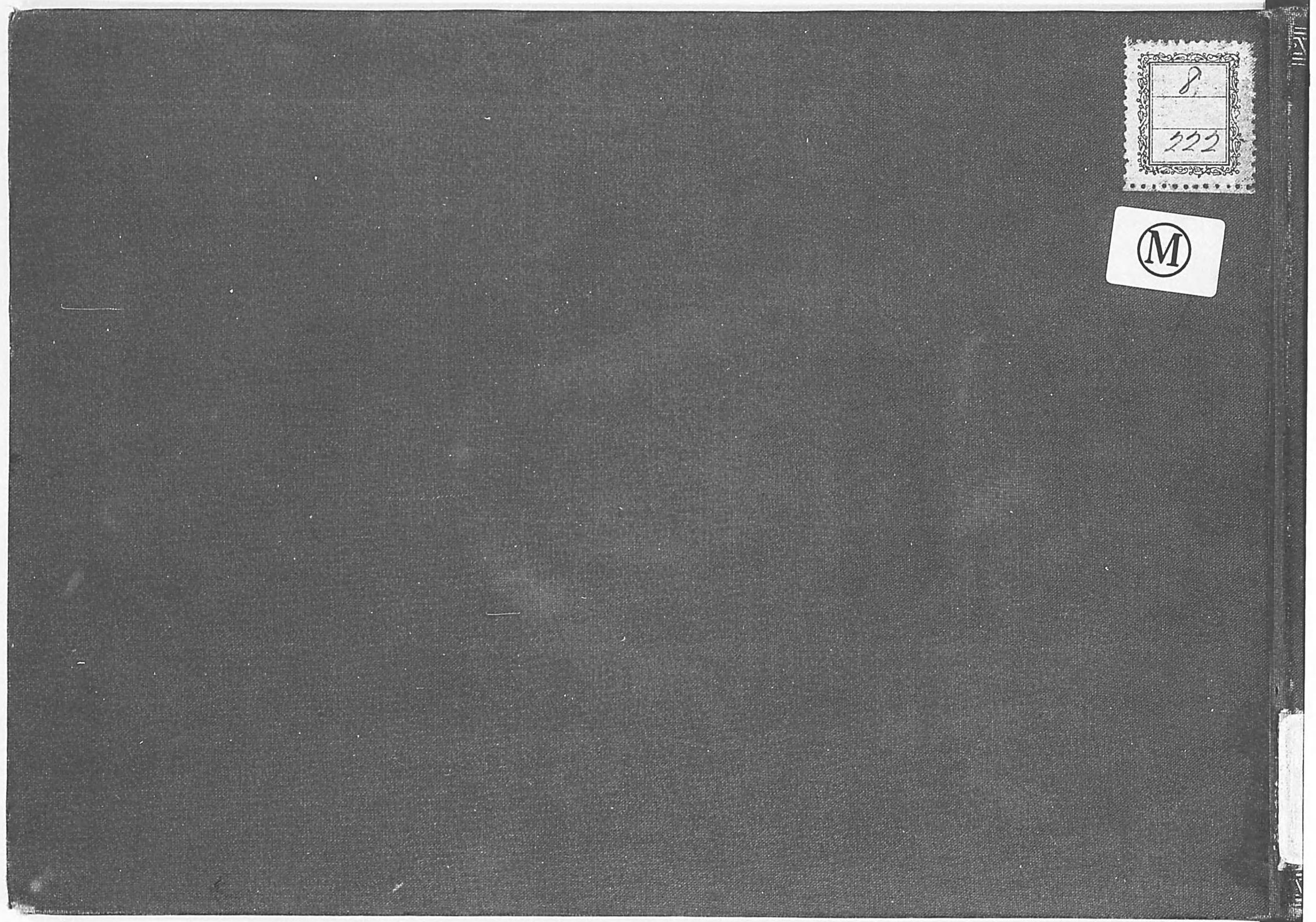
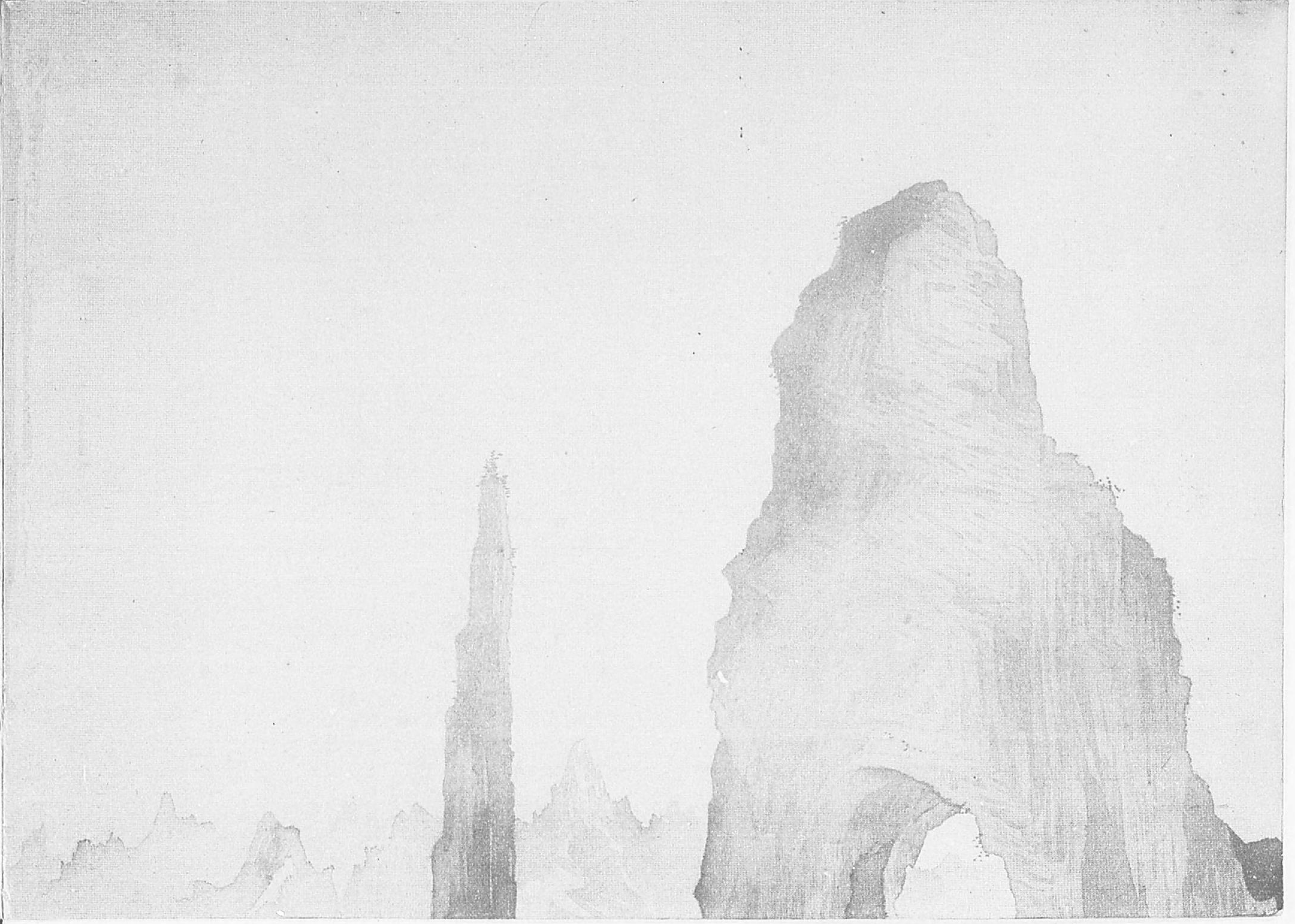


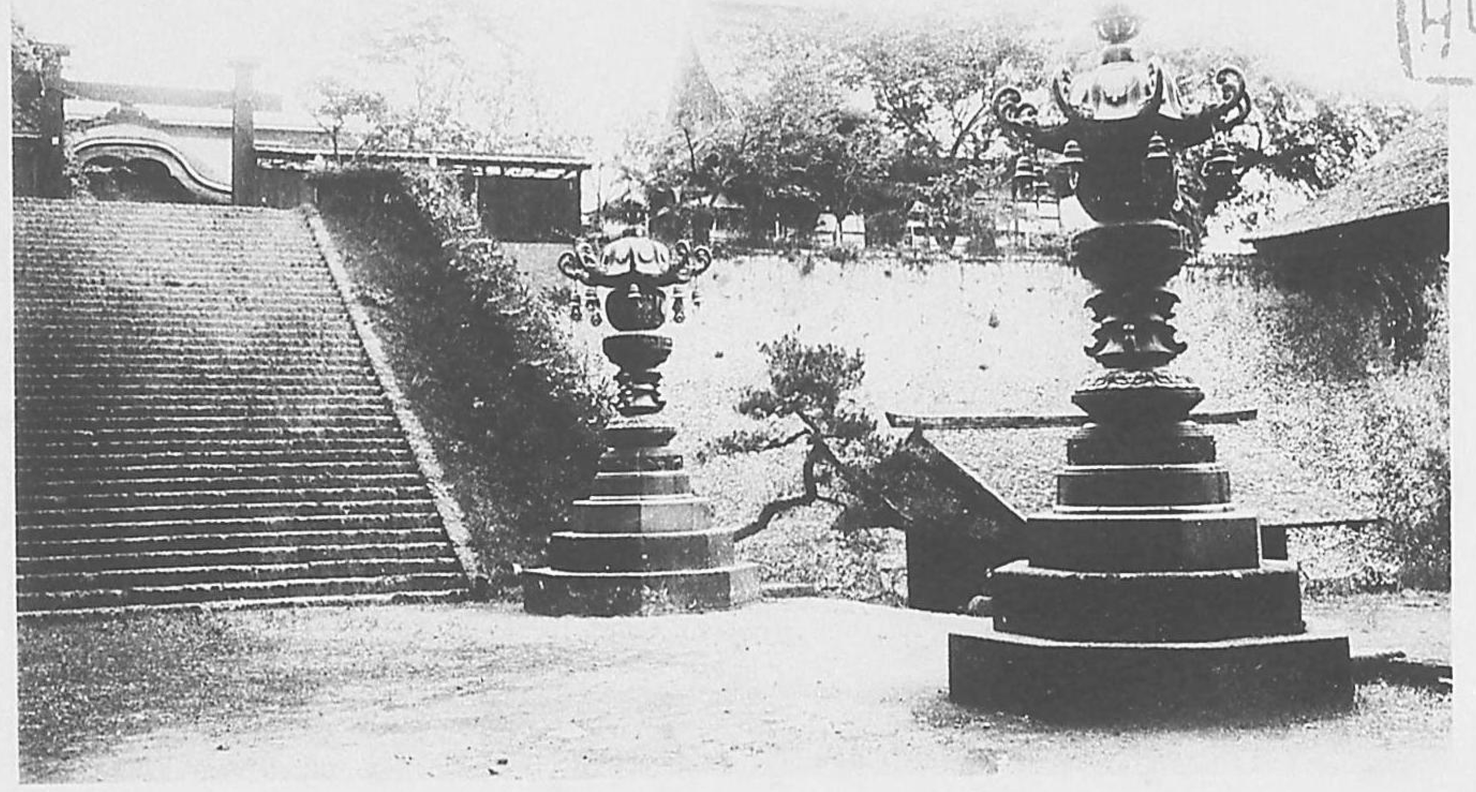
始

たひの家つと

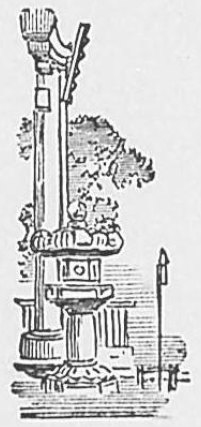
上州の巻

8
222





妙義神社表門



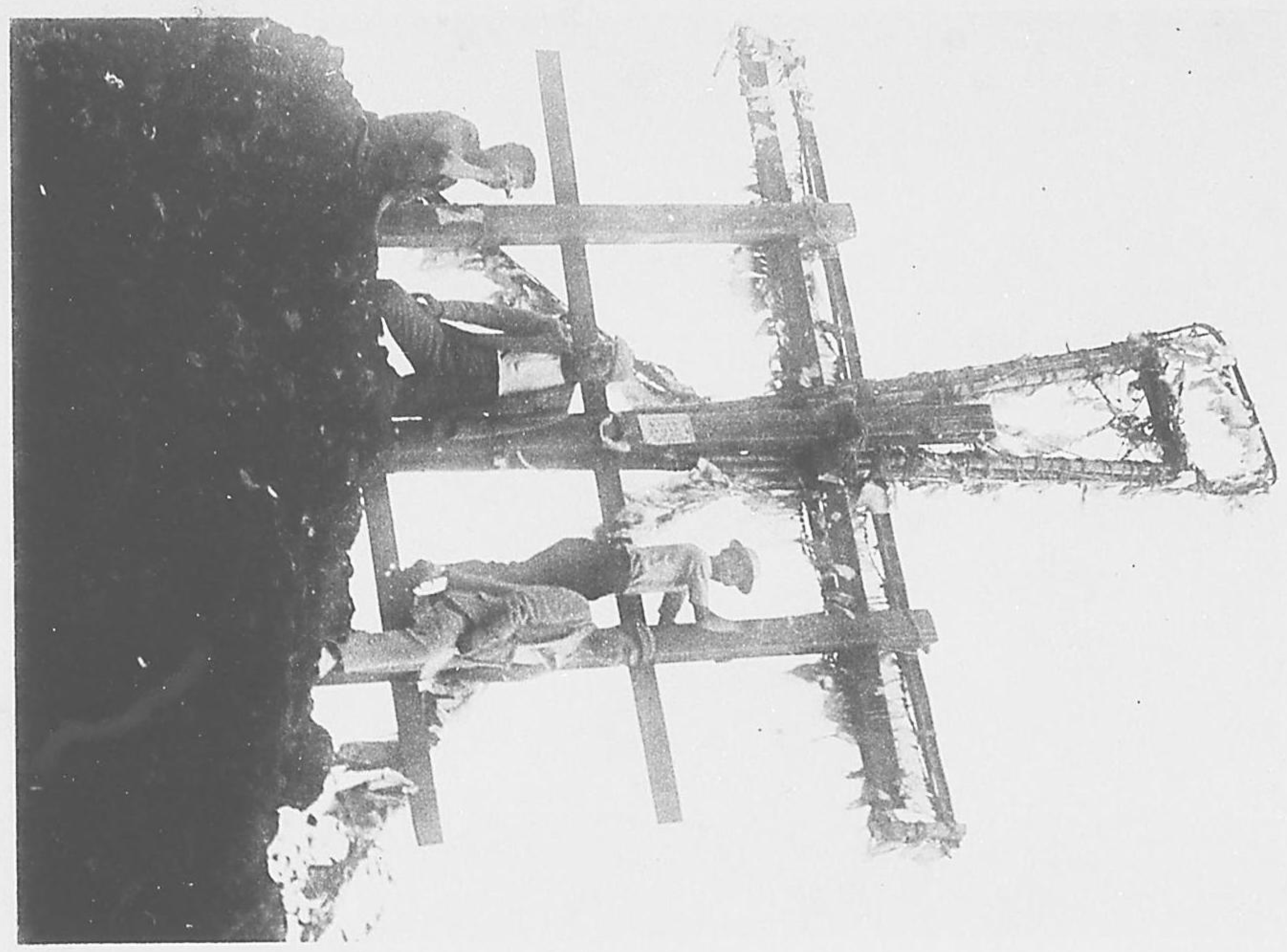
妙義の妙奇その名その嶺とゝもに高く　白雲　金洞　金鷄の三峯に分かる

神社は白雲の麓に在り古雅靜肅にして神威おのづから嚴尊人をして崇敬の念を起さしむ

妙義本社

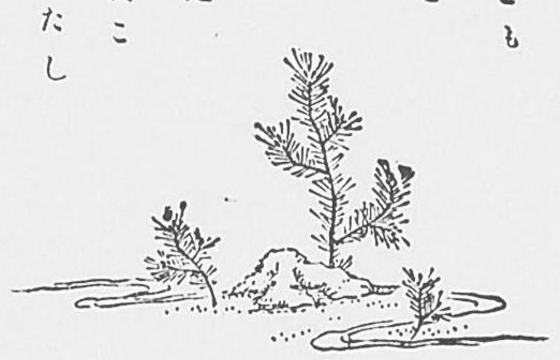
幾代へぬ祈る
しるしもいち
早きくにつ社
に立てる神杉　眞淵

世と共に色は
かはらじ東な
る國津社に祝
ふ松枝　千蔭



妙義山大の字

洛東如意峯のは火をも
て其形をあらはせども
妙義山なるは蔦葛まと
ひて緣門に設くる文字
の如くいつもあざやか
なり輕業が左右の手足
を廣げたる口上にはこ
れを假りていひたし



妙義山第一石門

理裝一路披榛莽石門之
奇今始尋峰巒相迎氣清
爽杉松時來影蕭森

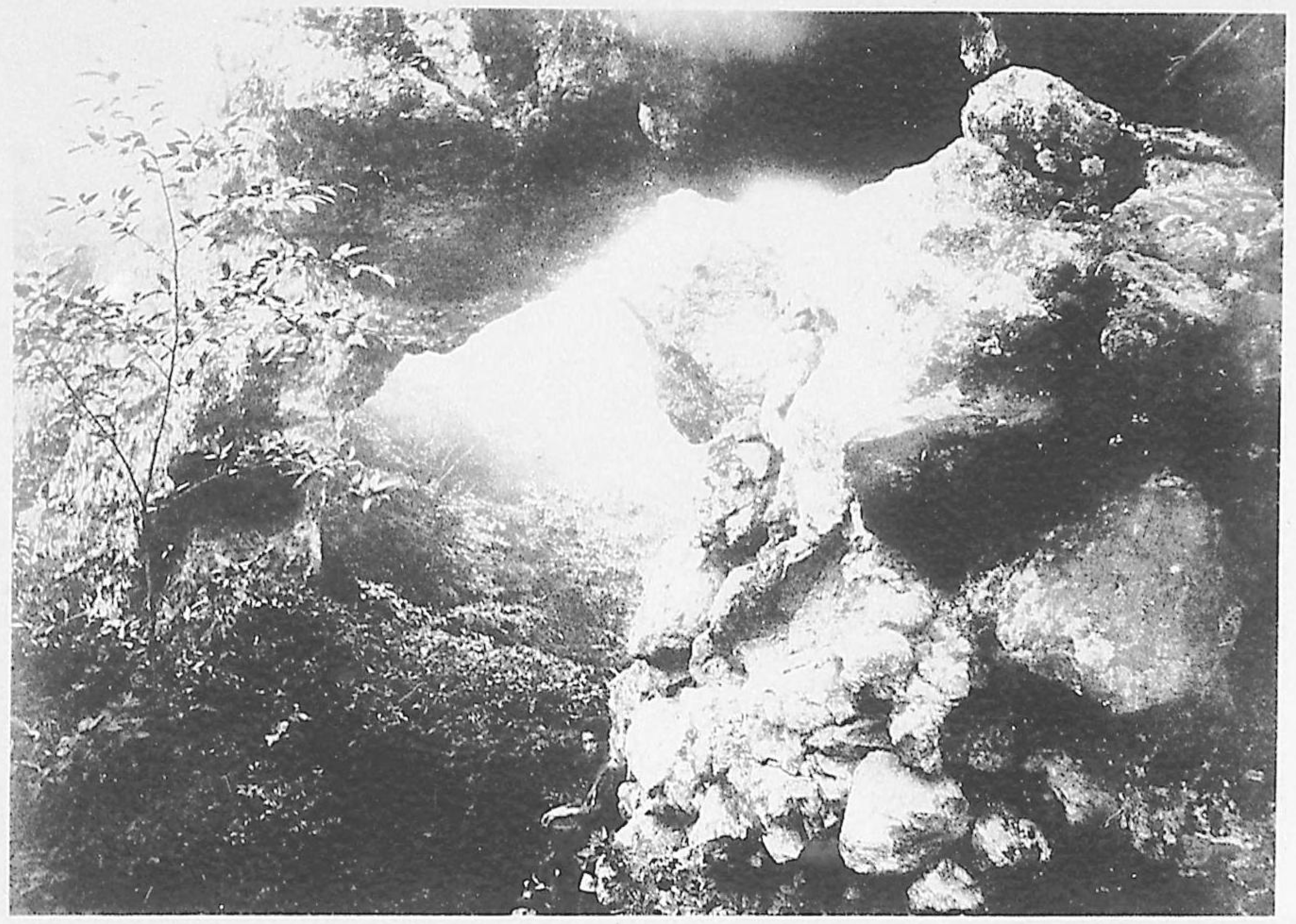
宮崎青谷句

秋霧の
戸張破るや
朝あらし

堂中

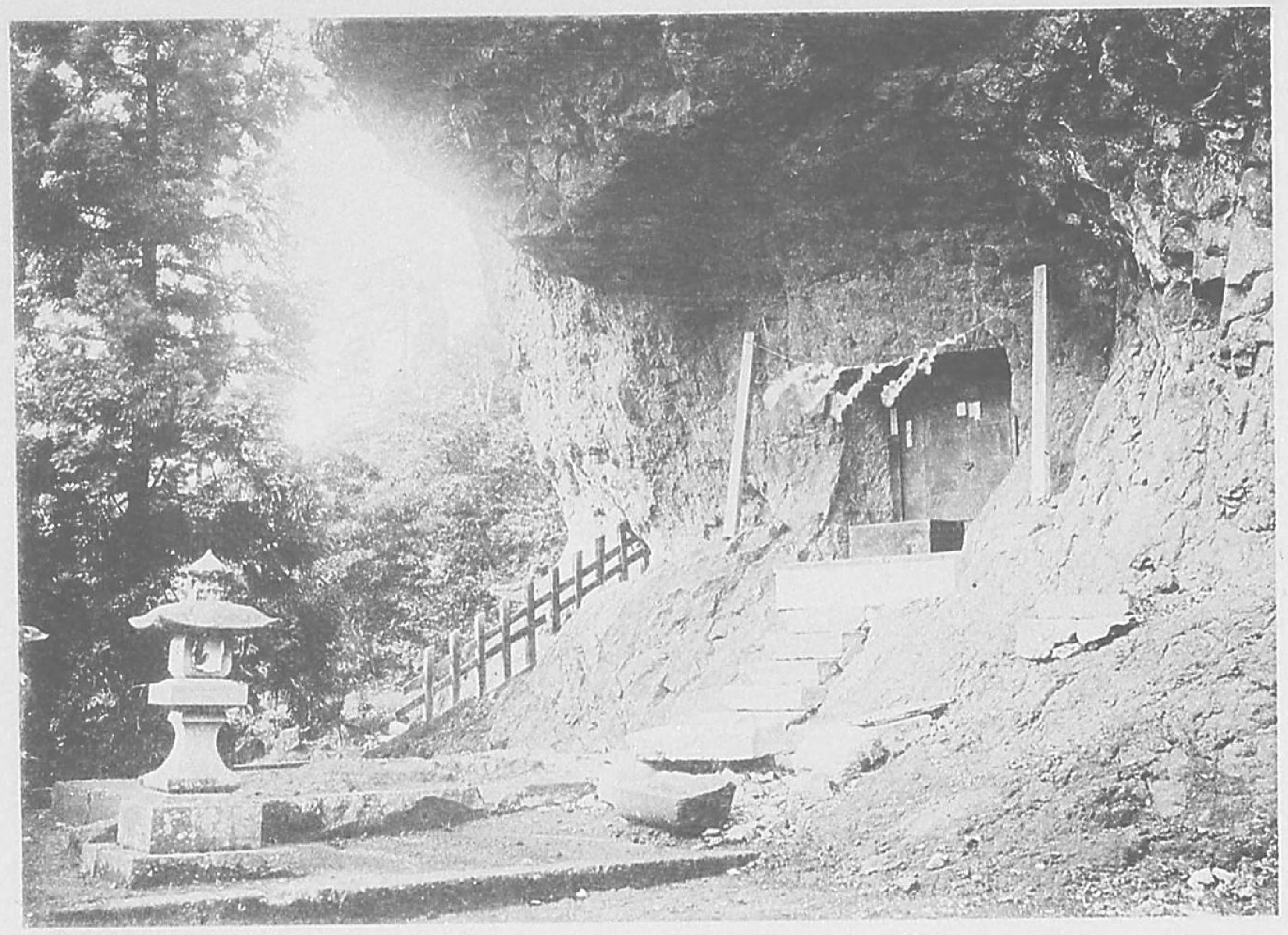
妙義山第二石門蠟燭岩

尖頭直立數十丈
其形の似たるを
もて蠟燭といふは
土人の付けたる名
なるべし雅馴
ならずといへども
見しありのまゝに
呼べる質朴
またなかし



妙義山第四石門

峙てるいはかごは今も頭の上に落ちかゝるらんと膽魂冷えて暫くも停りがたく白晝なほ物すさまじきを況て夜中に此所を過らんことは有るべしとも覺えずただ出入るは風と月とのみならん



妙義山日本武尊の窟屋

賊を討したまひて寶劍草薙の稱を傳へ妃をしのびまして東海吾妻の名を殘す平夷安陲の偉功今に著しく東山またその御遺跡多し宜なり尊を日本武とたゝへ奉るよ

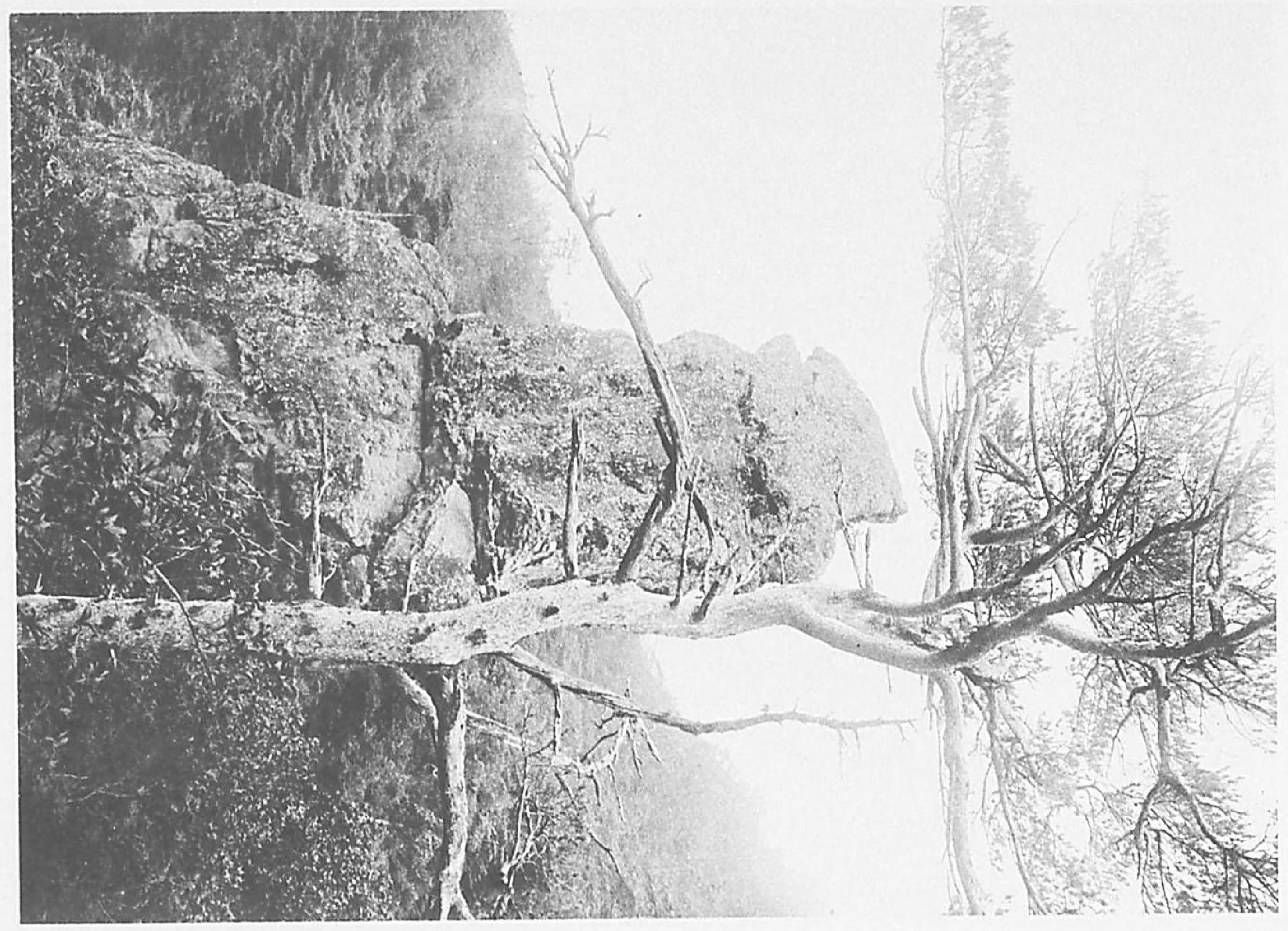
妙義山旭嶽

大嶽削り成す十二重翠
屏羅列して群峯を壓す
千年の老樹黄鶴栖み百
尺の飛流白龍掛る星落
ちて時に天狗の舞ふを
看雲低れて常に異人の
蹤を護る眞靈地古りて
祥景多く東海誰か岱宗
無しと言はん　石芰荷

妙義山旭岳烏帽子岩

大さび小さび
柳梨子打種々の
皺をひとつに
塗りて引つ立て
たるが風折となる
ためし無し

積む雪に短く
ならんゑぼし岩



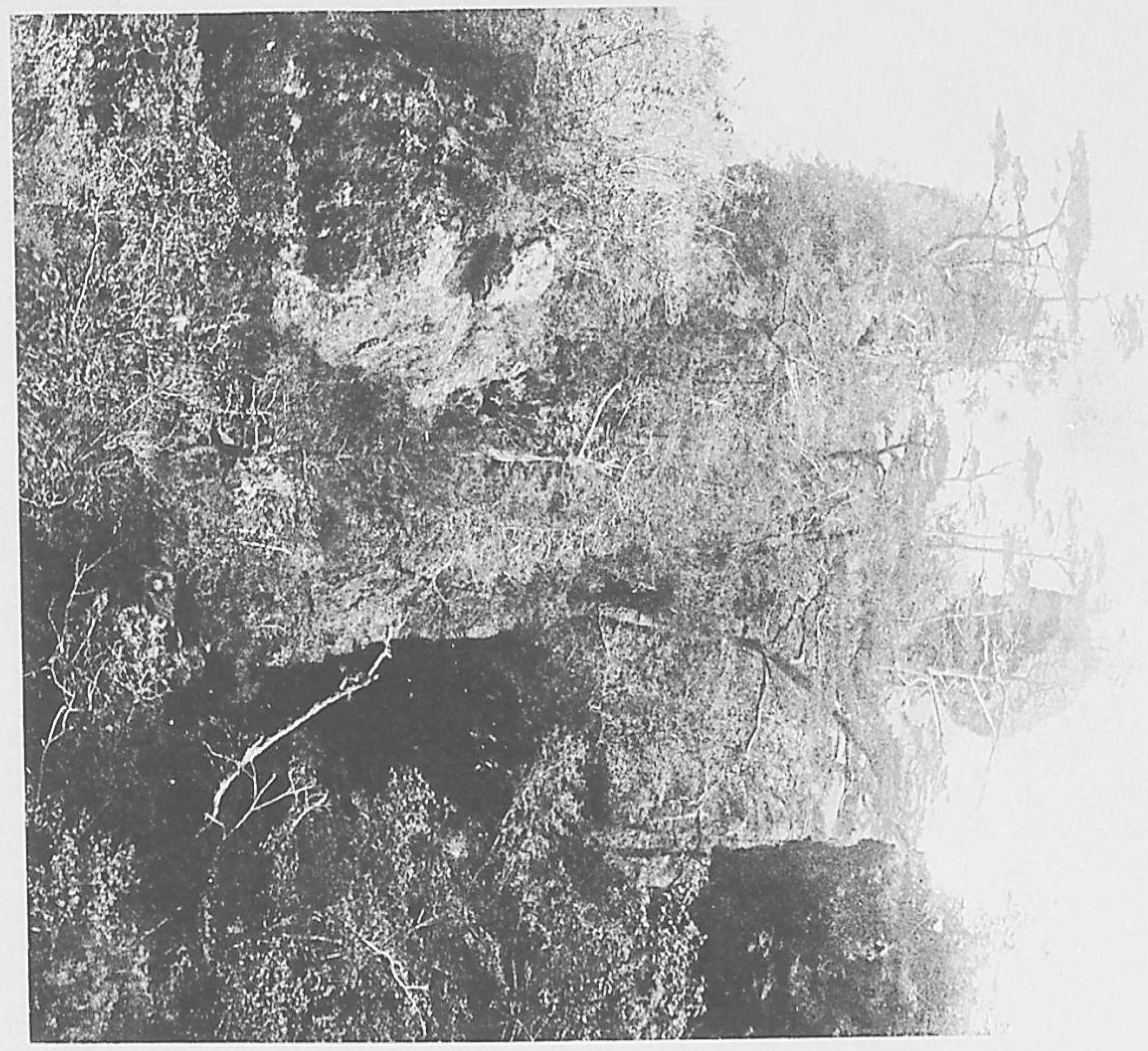
妙義山旭嶽頂上

身既に仙に化し雲に乘りて白日升天の思ひあり小澤蘆庵が歌に

はても無く
立ち重りて
青海の
波のすがたに
つゞく山々

妙義山天狗月見岩

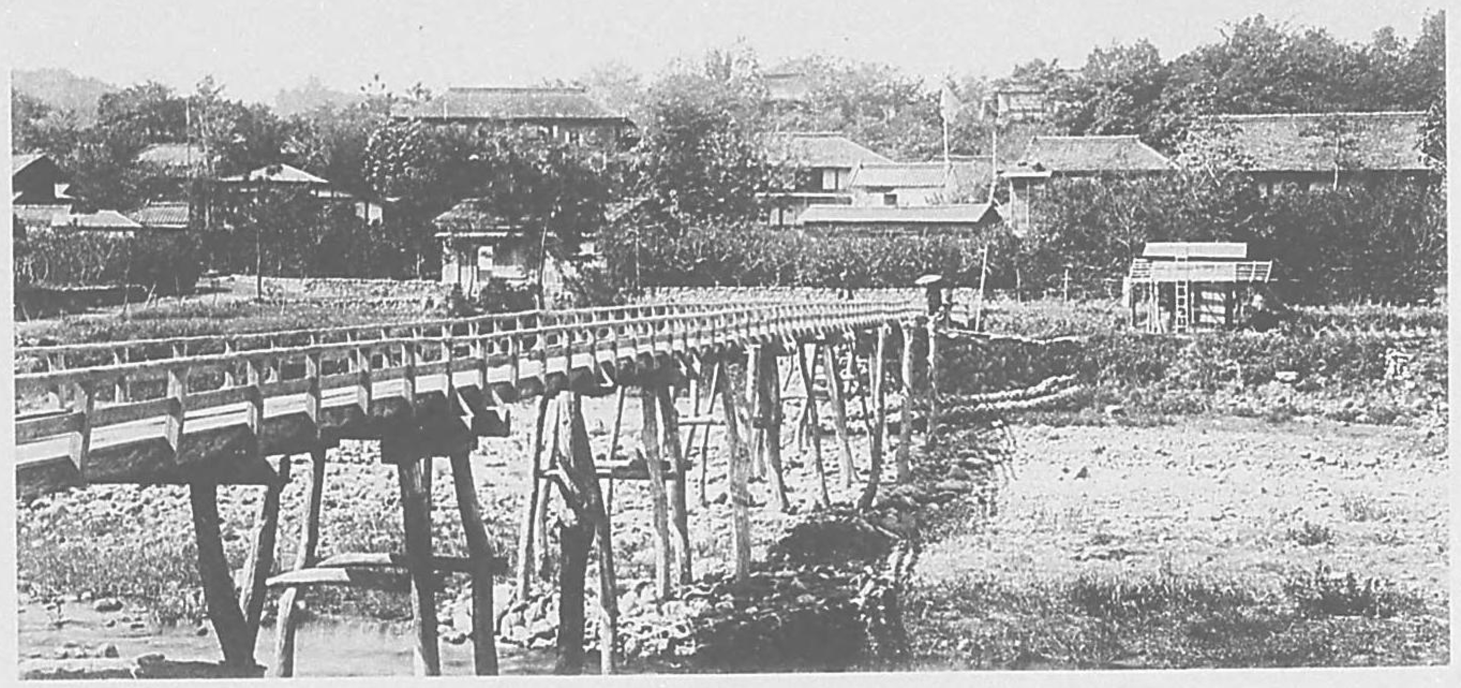
仲秋の清光を賞すとて音曲の鼻高等が琴弾き笛吹きちらすは下界の氣ばらし此月見岩につどふ魔僧羽客の類ひも山籟松聲を合せて夜遊の樂を催すなるべし



磯部溫泉

北方碓氷川の
清流に瀕し
西南妙義の奇峯
淺間の吐煙を望む
風景おのづから
心身を爽ならしむ

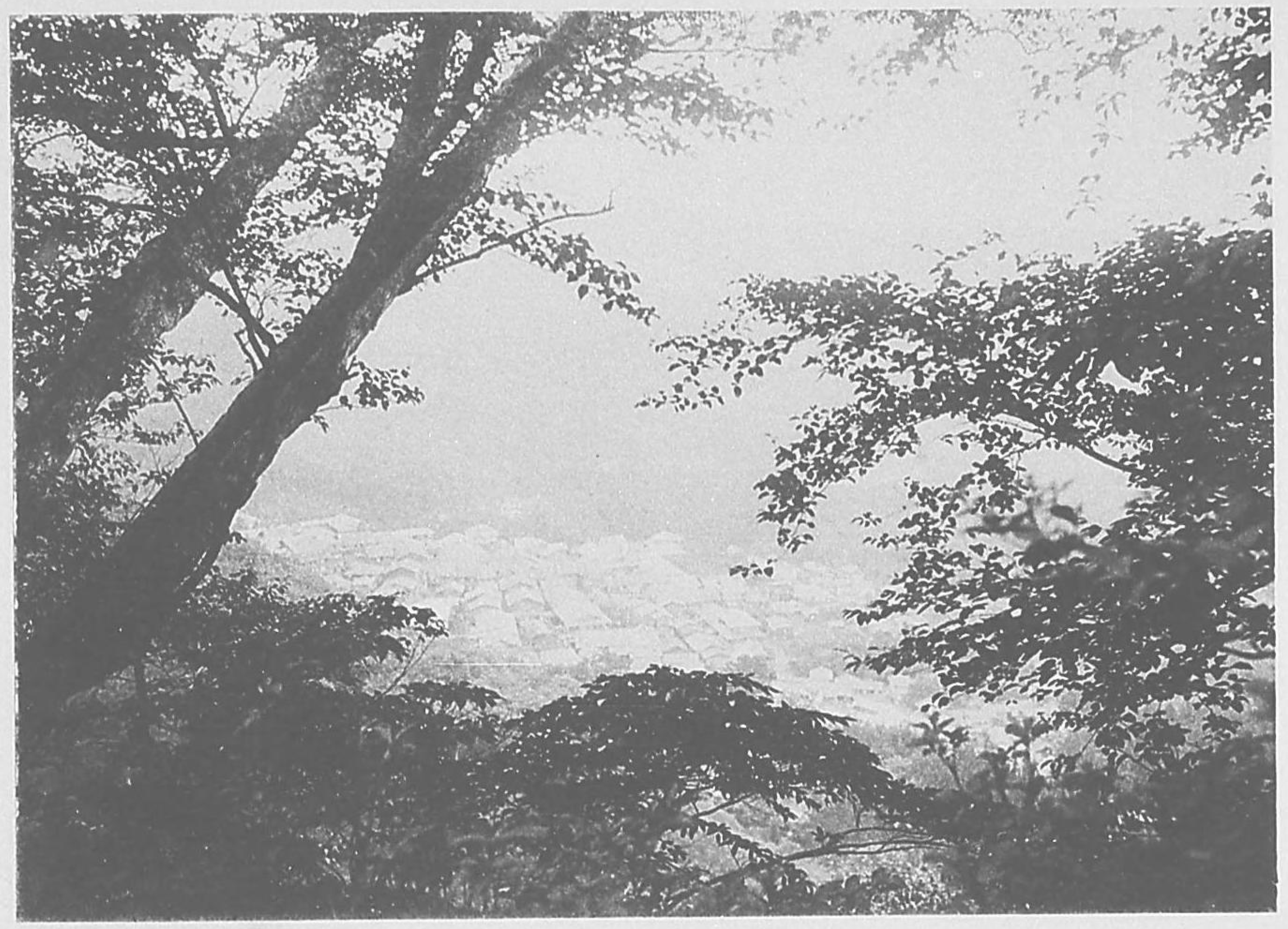
湯に入らぬ
さきに夏瘦忘れけり



伊香保市中

いかほなる物聞く
山の子規濁らぬこ
との聞ゆなる哉

と伊勢の詠みたる昔は知らず今は五百戸に餘る町となりて温泉の爲に來遊する客多し



伊香保七重瀧

樹木森々岩石
磊々たる中に
屈曲して落ち
下るなゝへの瀧は
ひとへにおも
白き眺なり

散る木の葉
水の折れ目な曲り皃

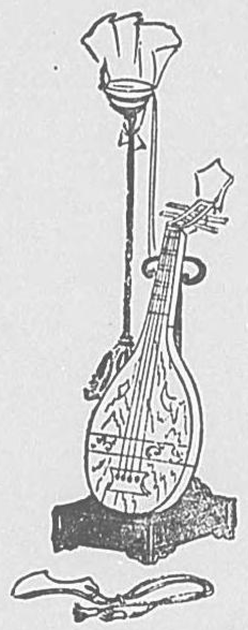
伊香保湯本道より二つ嶽遠望

かしこより此處を
望まばこゝもまた
彼所に同じ
霞なるらん
とや言はまし

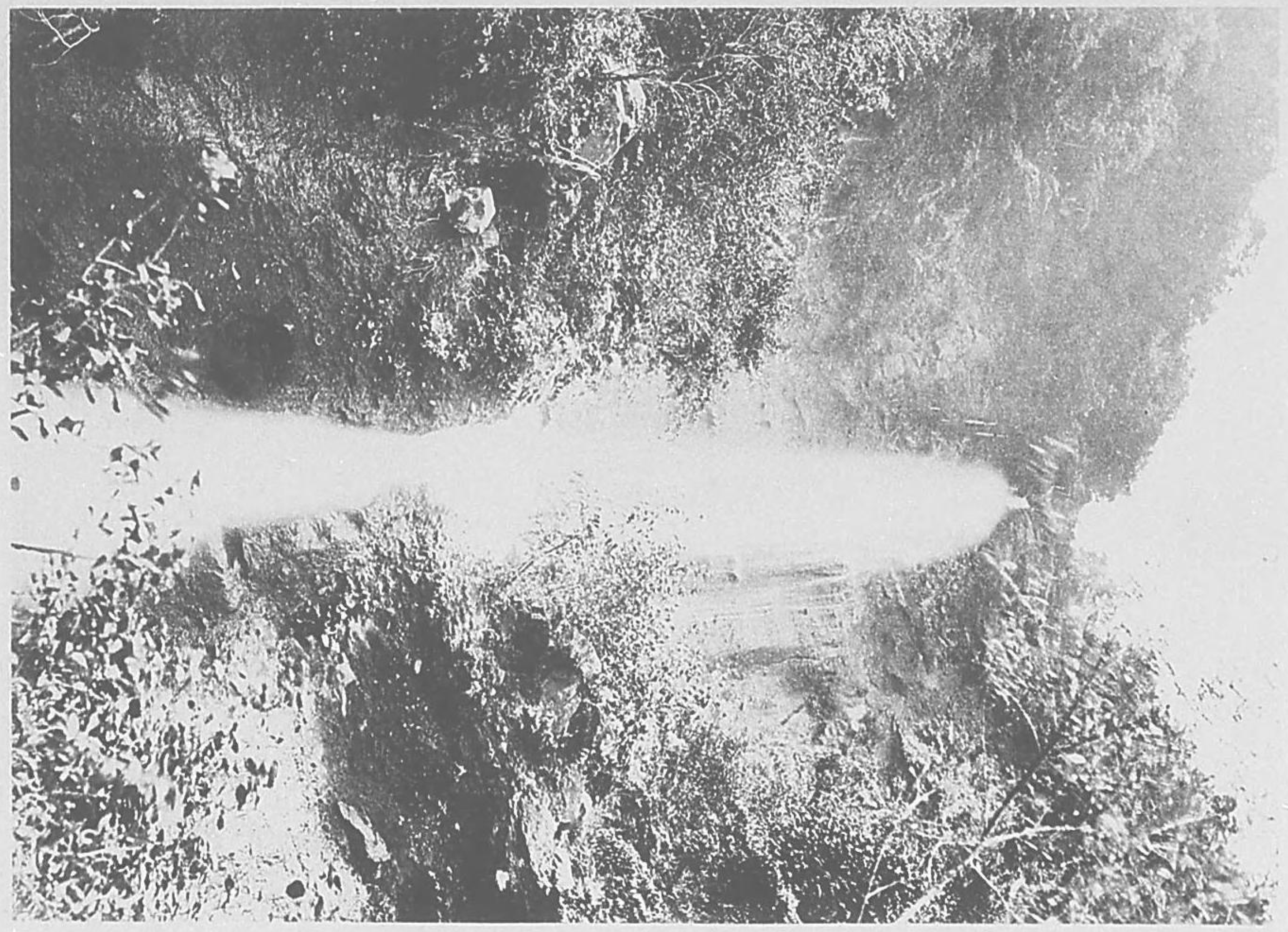
伊香保湯本

垂仁の御時に涌出せし靈泉も知る人稀なりしを文明の頃堯惠法師之をあらはし其後宗祇も來浴せしより名高うなれり天正中上の山の人家を今の地に移し、が明治の昭代にあひてます〳〵賑しきに至れり

伊香保辨天瀧



流泉啄木とか
きこゑし琵琶の
秘曲を松かぜの
琴に調べ合せ
たる瀧の響は
實に妙音天
女の名を負し
たるもうべ
なり



伊香保船尾瀧

坂東觀世音の靈場三十三番の札所船尾山水澤寺の奥なる飛瀑は絕壁より二層に下る高さ二十丈幅二間あり水煙四散して近づきがたし

汗ごりの
乾いて濡らす
瀧しぶき

榛名湖より榛名富士を望む

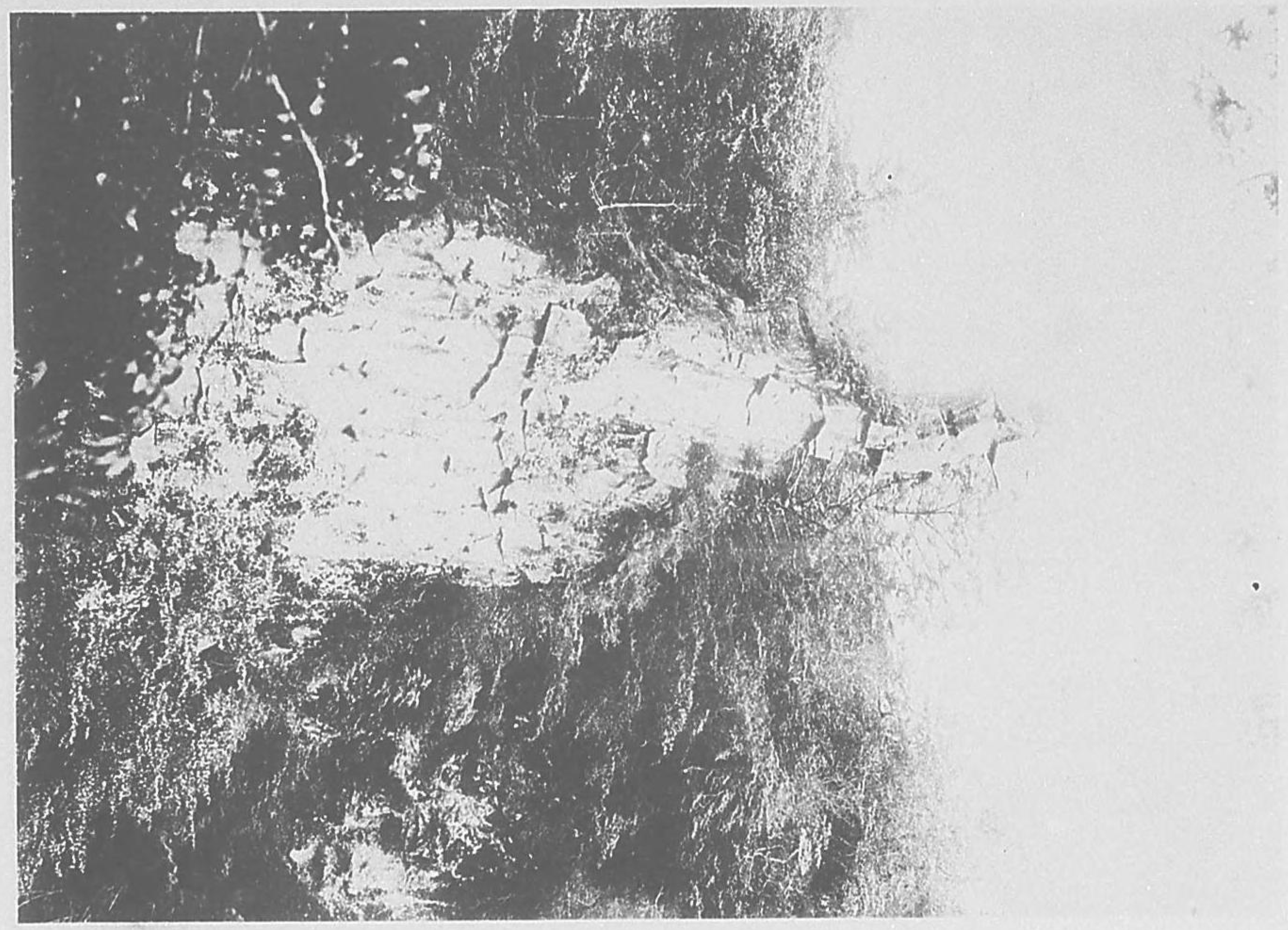
安積艮齋が此風光をうつしたる長篇中に

就中一峯尤秀麗
菡萏倒披映鏡光
忽疑巨靈子
擘山雙掌張
又疑夜半有力者
負戴蓮岳移一方

榛名湖畔より硯岳を眺む

むら雲は墨を
流して時の間に
硯がだけを
過ぐる夕立

と詠むる程なく晴渡りて湖面山容天色と共に鮮なり



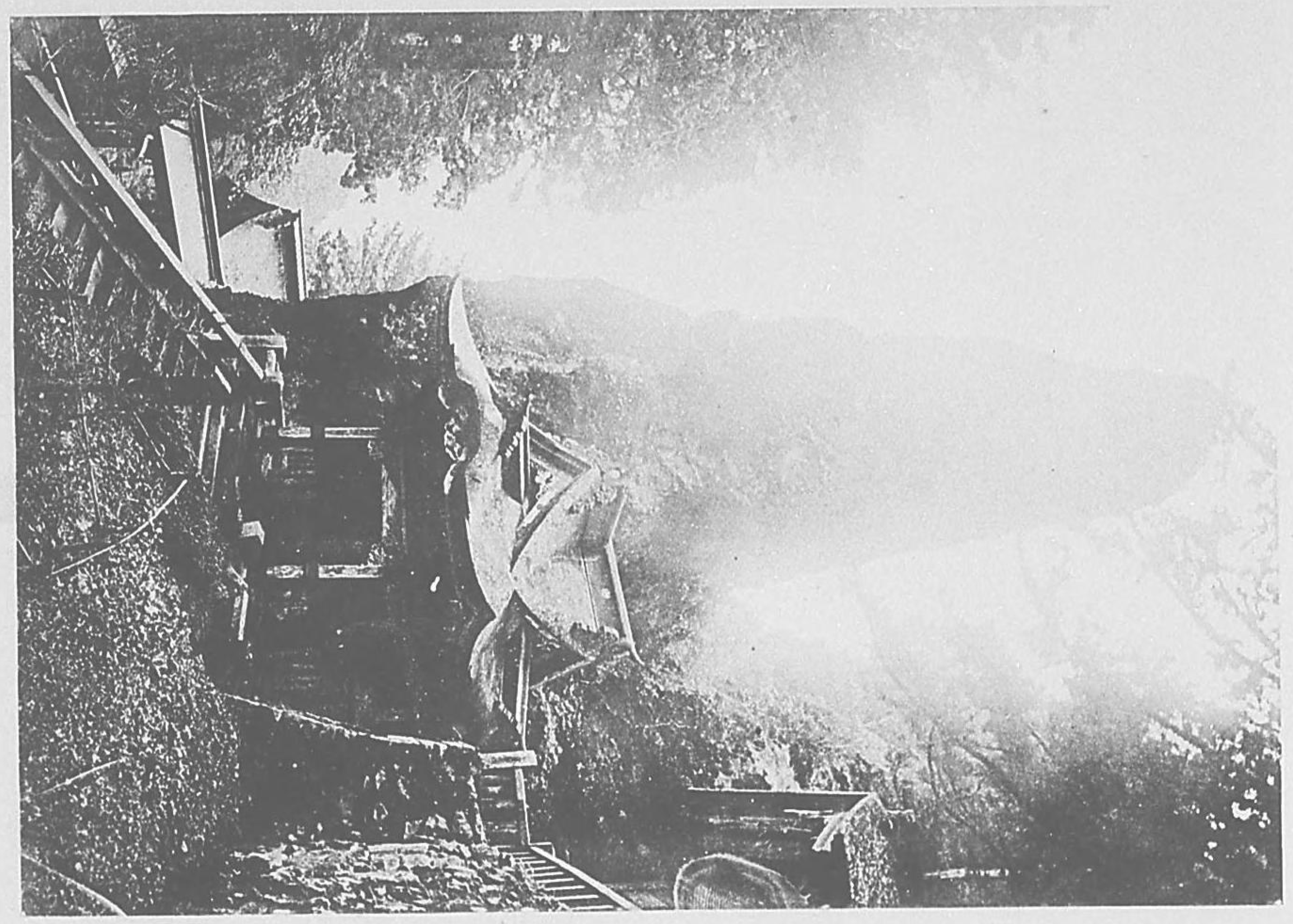
榛名山九折岩

春星堂鶯宿が句に
でゞ虫や竹一節を九折
といへる如く人もし此岩に這ひ登らば蝸牛に等しかるべし又其形葛籠に似たる故に名づくともいふ
つゞらなり　つゞらいづれの意にや知らず

榛名神社神橋

萬葉集にいかほの榛原とも詠みて古此邊に榛の木多かりしとぞ神社のあたり樹木ゝ生ひ重なり奇岩怪石種々の形をなせり

神橋の擬寶珠も
春の光かな



榛名神社樓門及蠟燭岩

雙龍門の傍に巨巌柱のごとく聳ゆるを鉾の岩といふ俗に蠟燭岩と稱ふる是なり鉾とは神さびて聞ゆれど蠟燭はむげにいやし同じ形容を言ふに雅俗の差別あるは見る人の心々によれるなり

明治卅三年十一月廿五日印刷
（旅の家土産第三十號）
明治卅三年十二月十[illegible]日發行
（非賣品）

發行兼印刷者　神戸市北長狹通五丁目四十六番地
光村利藻方寄留
中尾新太郎

發行所　神戸市北長狹通五丁目四十六番地
光村寫眞部

印刷所　神戸市北長狹通五丁目四十六番地
光村寫眞製版部

26/3/34

P
222

8
222

終